

### 〈資料解説〉名所図会の挿絵・写真にみる「旧観」江戸と「新景」東京

米家, 志乃布 / KOMEIE, Shinobu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

76

(発行年 / Year)

2022-03-20

## 【資料解説】

# 名所図会の挿絵・写真にみる 「旧観」江戸と「新景」東京

米家志乃布

## I 『名所図会』と人文地理学研究

近世の名所図会に関する研究は、文学や文献史学、人文地理学など、様々な分野で行われてきた<sup>1)</sup>。長谷川 (2012a) では、名所図会を対象としたこれらの諸分野の研究動向を3つの視点に分類している。第1に、作品の系譜や著者・编者・版元といった書誌情報の分析である。第2は、文章や図像の分析、場所の分析といった内容分析である。第3は、案内記の実用性や用途、反映される名所観や風景観の分析である。

とりわけ、このなかの人文地理学研究の動向に注目すると、第2と第3の視点に関わる研究が主である。特にその点にかかわって、地図上に比定される名所の場所およびその場所に関わる観念の分析が行われてきた (長谷川 2012a)。つまり、名所の場所の比定、GISによる分析、風景観の検証などが重要な作業である。

長谷川 (2010・2012a) では、主に秋里籬島の『都名所図会』を研究対象としている。江戸をはじめ、他の名所図会にも大きな影響を与えた京都の名所図会である。そこには、著者の「図の思想」があり、場所や風景を図化することで、名所風景を生産していたという。そして、『都名所図会』の挿絵に描かれた「京らしさ」とは、寺社景観の美しさ、皇都の姿、祇園会など京における民俗誌、京ブランドの生産、といった4点にあるとした (長谷川 2012a)。

一方、近世の名所図会研究に比べると、近代の名所図会研究の事例は少ない (長谷川 2012b, 米家 2020)。研究動向としては、やはり文章や図像

の分析が主であり、かつ観光ガイドブックの前身としての名所図会の研究でもあった (馬木 2004, 大宮ほか 1995, 森田ほか 2003, 高槻 2004・2005, 羽生 2005)。

近世の名所図会研究が、多様な論点で様々な分野で行われていることに比べると、東京の名所図会研究には多くの可能性が残されている。特に東京においては、情報量が多様で膨大である点、個別の事例研究に名所図会の記述を利用することはあっても、それ自体は学術研究になりにくい点などが、人文地理学研究の壁になっていた。

ところで、近世江戸では、『江戸名所図会』が編纂・出版され、多くの人々が江戸名所の風景の「定型」をそこから学んだ。有名な歌川広重の『名所江戸百景』や様々な名所絵なども、『江戸名所図会』との構図の類似性が指摘されている (大久保 2007, 東京都江戸東京博物館 2020)。そこに表現された江戸名所は、後の東京名所に対する人々の認識にも大きな影響を与えた (大野 2009)。

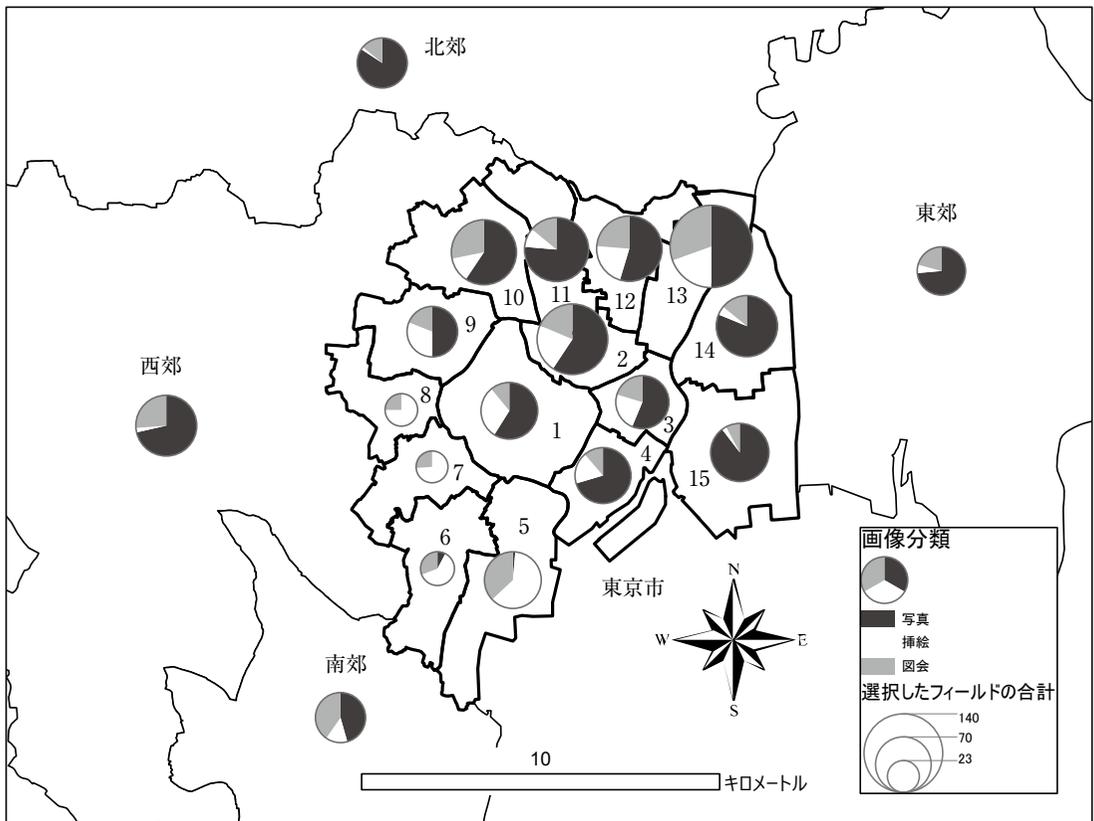
『江戸名所図会』そのものを対象とした研究は多いものの、東京名所と江戸名所の認識についての関係を検討したものは少ない。たとえば、羽生ほか (2003) は、いくつかの江戸名所記や東京案内の記述から、江戸の伝統的名所と明治以降の新しい近代的な名所の価値変遷を明らかにしている。しかし、主に記述をもとにした分類であり、挿絵や写真など、画像からみる名所風景の表象には踏み込んでいない。本稿では、まずはその点に着目して、資料解説を行うことを目的とする。

名所図会における記述とその挿絵・写真に表象される名所への「眼差し」は、作者や编者だけでなく、当時の人々にとって、ある程度、共通の場

所認識を示したものである。それゆえ、東京の名所図会を分析することは、近代東京における人々の認識、そこに表現された「東京らしさ」を明らかにすることに繋がると思った。

明治以降、首都東京では多くの名所図会や案内記が出版された。それらを概観してみると、観光ガイドブックの前身ともいべき小型・携帯用のものと、地誌・事典としても利用できる大型かつ大部の著作がある。江戸時代の名所図会の流れをくむものは、主に後者に属し、東陽堂発行の『風俗画報』（1889～1916）の別冊である『新撰東京名所図会』（1896～1908、合計64冊）や東京市編纂の『東京案内』（1907）などが挙げられる。

『新撰東京名所図会』は、近代化の激しい「新景」東京と「旧観」江戸を比較して描き出すことを目的として編纂されており、明らかに江戸名所図会の「東京」版として刊行された（米家2020）。その挿絵には、『江戸名所図会』の挿絵が数多く引用されており、東京を描いた挿絵や写真と比較できる。つまり、名所図会にみる「江戸らしさ」と「東京らしさ」の関係を解明するうえで、『新撰東京名所図会』は最も有効な史料である。同じく風俗画報の別冊として、続編の『東京近郊名所図会』（1910、合計17冊）も刊行され、両者を合わせると、東京市15区とその近郊における名所の全体像が把握できる。



地図作成：地理学科3年伊藤啓貴

第1図 東京市15区および近郊における名所の画像分類

東京市15区 1 麹町区 2 神田区 3 日本橋区 4 京橋区 5 芝区 6 麻布区 7 赤坂区  
8 四谷区 9 牛込区 10 小石川区 11 本郷区 12 下谷区 13 浅草区 14 本所区 15 深川区

（『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』（法政大学江戸東京研究センター所蔵）より作成）

## Ⅱ 『新撰東京名所図会』の挿絵・写真にみる明治東京の風景

『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』<sup>2)</sup>に記載のある名所 4,052 地点をプロットし、それらを、地誌的な記述と画像がセットである名所、記述のみの名所、画像のみの名所に分類し、データベース化作業を行った。第 1 図では、東京市 15 区およびその近郊を対象とし、画像が掲載されている挿絵名所 281 地点、図会名所 300 地点、写真名所 797 地点の分布を地域別に示した。

山本松谷による石版画（第 1 図では「挿絵」に分類）、長谷川雪谷による『江戸名所図会』の挿画（第 1 図では「図会」に分類）、写真である。江戸名所図会の挿画を「旧観」江戸の表象とするならば、明治の石版画や写真は「新景」東京の表象といえる（米家 2020）。

挿絵の掲載は、芝区が 45 地点と最も多く、浅草区、神田区、麹町区と続く。図会は浅草区が 47 地点と最も多い。また、近郊地区に図会の名所が多いことは興味深い。写真掲載は、浅草区 77 地点、小石川区 57 地点、下谷区 53 地点、神田区 67 地点、下町では本所区 69 地点、深川区 69 地点と多い。一方、宮城の南西部である四谷区、赤坂区、麻布区、芝区には写真の掲載がほとんどない。

この 3 つの画像がすべて揃っている名所は、全部で 13 地点である（第 1 表）。いずれも、江戸からの東京名所であり、寺社が多い。このなかから、牛込区の市ヶ谷八幡宮と浅草区の浅草広小路（雷門前）を見てみよう。

第 1 表 図会・挿絵・写真の画像がある東京名所

牛込区	市ヶ谷八幡宮	本郷区	吉祥寺
	神楽坂		根津神社
浅草区	浅草広小路	小石川区	氷川神社
	東本願寺		護国寺
神田区	神田神社		猫狸橋
下谷区	五條天神社		宗慶寺
	小野照崎神社		

（『新撰東京名所図会』より作成）

市ヶ谷八幡宮は、「明治以前、平日と雖も、境内境外甚だ賑へり」「その名つとに著われたり」と記述があるように、「旧観」江戸を代表する名所である。『江戸名所図会』では、境内全体を俯瞰し、多くの参拝者で賑わいを見せる構図がとられている（第 2 図）。



第 2 図 「市ヶ谷八幡宮」『江戸名所図会』  
（『新撰東京名所図会』第 43 編 牛込区之部下  
明治 39 年 8 月 1 日発行より引用）



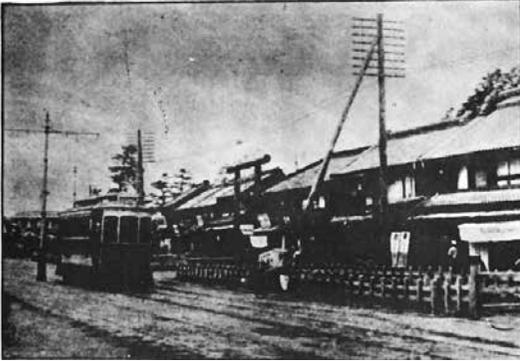
第 3 図 「市ヶ谷八幡神社の図」  
（『新撰東京名所図会』第 43 編 牛込区之部下  
明治 39 年 8 月 1 日発行より引用）

これは、近世の名所図会に多い「寺社参詣型」の構図である。

松谷の石版画でも、明治期の神社ではあるが、鳥居から拝殿まで続く参道の階段が描かれ（第 3 図）、寺社参詣型の構図の名残が見られ、名所としての賑わいも描かれている。一方、拝殿の右側に見られる空間について「梅あり、桜あり、広き遊園地あり」と記されていることは興味深い。実は、明治期の市ヶ谷八幡宮の境内隣地に、近代的な公園（遊園地）が存在した。この絵には、江戸

と近代東京の対比が見て取れる。

第2図と第3図の構図が類似していることに比べて、第4図の構図は異なる。外濠通り沿いの店舗と鳥居を眺め、その前に路面電車が写されている。これについては「甲武、街鉄、外濠三線の電車、往来するところ」とある。また、「靖国神社の箱棟、遊就館、富士見町、番町、眼の及ぶ限り、眺望を妨げず」ともある。



第4図 「市ヶ谷八幡町」

(明治39年7月19日撮影 『新撰東京名所図会』第43編 牛込区之部下 明治39年8月1日発行より引用)

次に、浅草寺と雷門前である。「当所は浅草区における要衝の市街」とあり、「常に繁華なる」ともある。浅草寺参詣者も隅田川遊びをする人も必ずこの地を通り、江戸名所図会にある雷門から仲見世通りの雰囲気(第5図)と明治期の雷門前の様子を対比させている。

第6図の題は「浅草雷門」、第7図は「雷門前」となっているが、雷門は幕末に焼失しており、明治期にはない。本文の記述では「浅草広小路」とある。浅草寺そのものの説明は、別巻である浅草公園の部で詳細に記述しているので省くとされている。

松谷の石版画(第6図)では、かつての雷門前から仲見世通りをまっすぐに眺めている。画面手前に人力車や道を渡る人々、そして線路が描かれ、左手奥に路面電車が見える。第7図の写真もかつての雷門前から仲見世方面を眺める構図ではあるが、写真特有の狭く切り取られた画像になっており、全体は見えない。松谷の描いた風景画のほうが、浅草広小路とそこに行き交う人々を生き

生きと描き出している。

市ヶ谷八幡宮と雷門前の両者の風景で表現された、江戸から明治東京への変化の共通点は、いずれも江戸以来の寺社およびその門前の繁華な名所が、東京市内の路面電車網に組み込まれ、交通の要衝になっていく様子である。とりわけ、旧観である江戸に上書きされるモダンな新しい風景として、路面電車や電柱などが登場することにも注目したい。

なお、隅田川に架かる鉄橋などの近代橋梁も、路面電車と並んで、東京における近代的な名所風景の表象である。明治期の東京名所として、橋は幅広く名所として認識されていた。たとえば、京橋区の「三ッ橋の現況」という挿絵(第8図)が興味深い。

「三ッ橋」とは弾正橋(鉄橋)・白魚橋(木橋)・真福寺橋(木橋)の3つを指す。右奥に小さく見える櫻橋(石橋)は明治以降に架けられた橋であり、路面電車の停留場が設けられた。木製・鉄製・石製の橋がひとつの挿絵の中にある。第8図のなかには、3種類の橋を通して、まさに「旧観」江戸と「新景」東京が織り成す明治東京の風景が描かれている。

しかし、1937(昭和12)年の東京市役所編『大東京案内』を見ると、日本橋と隅田川にかかる12の鉄橋のみの紹介である。1923(大正12)年に発生した関東大震災は首都東京を大きく変えた。東京に架かる橋の多くは失われ、莫大な費用をかけた帝都復興事業において、隅田川には巨大な鉄橋が架けられた。明治期の東京市内各地にあった小さな橋は、昭和戦前期には名所としての対象から外れ、より大きな鉄橋に注目が集まることとなった。

このように、『新撰東京名所図会』に掲載されている画像資料を読み解くことは、単に明治東京の名所を明らかにするという意義だけではない。本資料は、震災前の東京の姿を語る貴重な証拠でもある。大正末期に起こった未曾有の大震災によって、失われてしまった東京の都市風景を復元するという重要な意味があることも忘れてはならない。



第5図 「金龍山浅草寺」『江戸名所図会』

(『新撰東京名所図会』第55編 浅草区之部其二 明治41年5月20日発行より引用)



第6図 「浅草雷門」

(『新撰東京名所図会』第56編 浅草区之部其三 明治41年6月20日発行より引用)



第7図 「雷門前」

(『新撰東京名所図会』第56編 浅草区之部其三 明治41年6月20日発行より引用)



第8図 「三ツ橋の現況」

(明治34年3月写 『新撰東京名所図会』第29編 京橋区之部卷之一 明治34年3月15日発行より引用)

以上、『新撰東京名所図会』の挿絵・写真の解説を通して、江戸から東京への名所風景の変容を考察してきた。当時の人々の風景観をさらに深く検証するためには、単なる絵画や写真の表現として分析するのではなく、現実の地理空間との関係性から検討する必要がある。そのためには、当時の人々の名所経験や風景体験を、他の関連資料とも合わせて検証していくことが重要である。

### Ⅲ 今後の作業と課題

『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』には、挿絵・写真だけでなく、地誌的な記述も多い。これらの膨大なデータをもとに、場所の比定、GISによる分析、風景観の考察を行う必要がある。また、東京市編の『東京案内』など、同時代の他の資料とも比較検討し、明治東京の名所の全体像を明らかにする作業も残されている。

さらに、名所図会のデータ分析は、史料の特性および名所の解明という側面だけでない。「名所図会」という史料研究を通して、江戸から明治・大正・昭和と時代を経て、人々の東京という都市認識の変容を考えていくことにもつながる。

なぜ人々は都市の名所風景を言葉にしてつづり、絵に描き、写真に撮ってきたのか。人々にとって「名所」認識のもつ意味は何だったのか。それぞれの時代やそれぞれの都市における共通点や差異を検討することによって、当時の人々の認識だけでなく、現代の私たちにとっての「名所」とは何か、を考えるきっかけにもなるだろう。

#### 付 記

本稿で解説した『新撰東京名所図会』『東京近郊名所図会』のデータは、2018～2021年度の「人文地理学演習(5)」（米家ゼミ）履修生のグループワーク作業によるものです。その成果の一部は、2021年の法政大学江戸東京研究センター「江戸東京アトラスプロジェクト」（代表：福井恒明）のワークショップ（2021年2月28日・10月23日）で発表しました。

2月28日発表メンバー：鈴木康太郎・高野陽翔・松田祐也・品川勇翔・佐久間紗月・本村知之

10月23日発表メンバー：竹内廉太郎・伊藤啓貴・栗林有希・三村優奈・戸井佑亮

米家ゼミおよび一緒にプロジェクトをすすめているデザイン工学部景観研究室の皆様にご挨拶いたします。

#### 注 記

- 1) 近世の名所図会に関する先行研究は、長谷川(2012a)において詳細な紹介があり、そちらの文献リストを参照されたい。
- 2) 本稿では、法政大学江戸東京研究センター所蔵の資料を利用した。『新撰東京名所図会』第1編～第64編、『東京近郊名所図会』第1巻～第17巻。

#### 参考文献

- 上杉和央 2003. 17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観. 地理学評論 77-9. 589-608.
- 馬木知子 2004. 名所本にみる近代東京の都市風景の変容について. ランドスケープ研究 67-5. 623-628.
- 大野光政 2009. 江戸百景. 本の泉社.
- 大久保純一 2007. 広重と浮世絵風景画. 東京大学出版会.
- 大宮直記・下村彰男・熊谷洋一 1995. 名所図会・百景にみる近代以降の東京における「景」の変遷に関する研究. ランドスケープ研究 58-4. 429-437.
- 米家志乃布 2020. 近代の名所図会にみる江戸イメージ. 法政地理 52. 109-124.
- 鈴木章生 2001. 江戸の名所と都市文化. 吉川弘文館.
- 高槻幸枝 2004. ガイドブックに見る「名所」の変遷——1830年代の江戸から2000年の東京まで——. お茶の水地理 44. 43-54.
- 高槻幸枝 2005. 明治期の東京と名所. 比較日本学研究所センター研究年報創刊号. 67-74.
- 東京市編 1907. 東京案内上巻・同下巻.
- 東京市役所編 1937. 大東京案内.
- 東京都江戸東京博物館編 2020. 名所江戸百景と浪花百景. 東京都江戸東京博物館調査報告書第34集.
- 長谷川奨悟 2010. 『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象. 人文地理 62-4. 60-77.
- 長谷川奨吾 2012a. 近世上方における名所と風景. 人文地理 64-1. 19-40.
- 長谷川奨吾 2012b. 明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察. 歴史地理学 54-4. 24-45.
- 羽生冬佳・岡野祥一 2003. 江戸の伝統的名所の特性と明治以降戦前までの名所としての価値の変遷に関する研究. ランドスケープ研究 66-5. 457-460.
- 羽生冬佳 2005. 明治以降戦前までの東京の名所の成立・変遷に関する研究. ランドスケープ研究 68-5. 843-848.
- 森田善紀・羽生冬佳・十代田朗 2003. 明治以降戦前までの東京案内本の記載情報の変遷——旧東京市15区6郡を対象として——. 観光研究 15-1. 11-18.